

田・深浦・八戸では、著しい下降気流の結果とみられる、 2°C 内外におよぶ気温急昇を記録した。この下降気流は、寒冷前線前方のメソ・スケール対流の一部で、不安定線の発生、維持に役割を果たした。

(6) 毎時局地天気図の解析によれば、 B_2 突風系に対応する時メソ・ローは、16日8時頃、2次前線の前方に発生して NNE 進し、12時すこしまえ、大間岬の西側を通り、13時すぎ戸井村沖で海難を惹き起した。その頃が、最盛期で、13時30~40分に恵山岬—函館の線を北にすぎる頃から急速に衰えた。

(7) B_1 系は、青森付近では、秋田・深浦通過時よりかなり衰えており、田名部の記象には現れていない。ただ、その西方部分はさらに ENE へ移動したもようで、これが竜飛岬を経て渡島福島沖方面を襲った、別の W より突風系であったらしい。

(8) 類似例として、最近だけでも、昭和38年6月14日、および昭和39年1月20日の、ともに SW 寄り 30m/s 級の突風をあげることができる。

7. むすび

(1) 遭難関係者は、当時の状況を、『16日12時15分頃、汐首岬(戸井村)沖合では、風が5, 6 m/s に弱ま

ったが、12時30分頃風向が S~SW に変わり、雹が2分間くらい激しく降り、小竜巻が2, 3発生し、13時15~20分から風力が急激に増した』と云っている。

(2) 国内に於ても、九州方面の突風については、従来、多くの研究が行われたが、北日本では、わりあい少なかったようである。今後、函館山気象レーダーを活用して、より詳しい解析例を積み重ね、予報の手がかりを掴むことは、V・H・F 速報系の整備とともに、防災上、大切な課題と考える。

(3) この調査のため、前出の各気象官署・部外機関のほか、札幌・仙台両管区気象台、稚内・盛岡両地方気象台からも資料を恵与されたことに謝意を表します。また、種々お励ましいただいた安井台長・成田予報課長に感謝いたします。

参考文献

- 1) メソ気象学特集〔渡辺(和), 渡辺(次), 今井, 香原ほか〕; 気象研究ノート Vol. 11, No. 2 (1960).
- 2) 岡村 存 九州付近における不安定線; 気象研究ノート Vol. 14, No. 1 (1963).

〔新書紹介〕

「お天気歳時記」

大野義輝・平塚和夫共著

ベーターベンやモーターが黄砂や降水量と同居していたり、ケイン号の反乱が大寒小寒に続いていた、スズラン・キョウジョシギが飛びだしてくる気象雑学の集録である。気象庁の天気相談所にコンビと組んでいた両氏が昭和38年1年間に、東京新聞に連載していた、日々の気象に関連した小文を日を追ってまとめ、それに天気図の昔話やダイヤル 222 の設立裏話等をつけ加えてまとめたもの。

つれづれ草のような味わいをもっている文集だが、短かい季節の紹介の中に、いろいろの知識が得られる。それは鳥や花についてだったり、文学・歴史の分野であったり、決して気象そのものだけではない。

つけ加えられた、「天気図あれこれ」の中には日本気象界の初期の天気図から最近の天気図がのっているのも気象の発展を知る上で興味深いし、「ダイヤル 222 創業

始末記」では、天気相談所の仕事が小かりやすく解説されていて、気象関係者でも知らなかったことも数多いのではないかと思わせる。

題名に反して、気象にほとんど関係のない記事がのっている日が二・三あるのと、明らかに制限字家のために生じたと思われる誤り、(たとえば、5月28日の項に「雲粒の直後が0.02ミリから0.03ミリがいちばん多いらしい」は「0.01ミリから0.015ミリくらいがいちばん多く、雨が降りそうな濃度な雲になってくると0.02ミリから0.03ミリの雲粒が増加してくる」としなないと正確でない。また6月9日の「ヨーロッパの雨が降り方が弱く」は「雨が降る時間が短かく」でなければ誤解されよう。10月7日の項の高層雲が高積雲と一語にのべてあって、「4000メートルをこえる中層の雲」になってしまっている等、)は、おしいぎずである。

しかし、毎日毎日の季節感がもりこまれて、気象解説書としても、一風変わった副読本的な存在として便利な本であろう。